

同和○明 三戌二月是迄は振殘之玉は、又々日々新規に拵、玉入來所以來ハ相止、初日入之玉、終迄御取用に相成間、御組付御當番日に而、玉除に相成分は、其當日玉場不始以前、御届申上置、落玉は翌日御米渡り、其分計除相願、其翌々日、其御組分御米可請取事、

〔淺草米廩舊例〕明和四亥年十月、松平右近將監殿被仰、渡候御書付寫、

御藏奉行江申渡

一 三季御切米之御節金渡之儀、隨分手廻いたし、晚景ニ不成様可致候事、○中

一 三季御切米并御扶持方、玉入候儀、渡方初日ニ至爲入置、振仕廻候度、每玉柄杓へ、札差行事共、封

印爲致可申事、○中

十月

右之趣、御藏奉行江可被申渡候、

〔札差業要集〕中 享保年中より文化迄御藏方荒増之扣、○中

明和五年九月迄、不勤御扶持方も三枚立玉一ツ宛之處、結玉札差一人別手形何枚有之共、玉一ツづ、石渡リニ不勤之分相成ニ付、是迄端ニ相成一人扶持二人扶持等之分計リ、立俵ニ入、相渡

來分、以來右之俵之代并諸入用、御屋敷方江相掛間鋪御達、御請書差出事、○中

一 文化元子夏、三百俵以下皆金渡り、其後御役料共、米金渡りに付、玉入渡リ方共、七段ニ相成事、

〔天保集成絲綸錄〕八十六、寛政三亥年八月

大目付

千俵以下勤仕之面々へ、當冬御切米渡之内五分一、此節御米ニ而、御借米被下置候間、被得其意、受取方之儀ハ、御勘定奉行可被談候、

八月